＊＊　私たちの住む金田村の記憶　＊＊　　（２０２２．４）

金 田 村 の 空 襲　　２

前回記しましたように、地元の方々からの聞き取りのみならず、小学校の日誌によると、金田村は「平塚大空襲」での爆撃だけでなく、空襲警報が昼夜を問わず発せられていました。

地元への爆撃は、「平塚大空襲」以外ありませんが、艦載機による機銃掃射は下校中の子供たちや地元の方々にも襲いかかりました。

金田村に住まう人々は、第二次世界大戦の戦時下、身をもって、「戦争」を体験しました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大空襲の時、焼夷弾が地面に突き刺さり、火を噴いていた。無理やり引き抜き、川に投げ込み消し止めた。

双胴の艦載機、ノースアメリカンが超低空で飛来し、航空帽をかぶった兵士と目が合って、とても怖かった。機銃掃射に合ったこともある。

上空に偵察機らしき飛行機が確認されると、あくる日には、襲撃を受けた。

湘南平の高射砲は、敵機に命中しなかった。空中戦もみた。

軍事教練の教官は、怖く、「びんた」もあった。

飯島に「赤とんぼ」が墜落し、機体は前のめりに回転していた。

日本の練習機は、厚木の中津飛行場から飛び立ち、農業高校生などが飛行場の草刈をした。交通手段は自転車、お国の為に働いた。

学徒動員で、横須賀海軍工廠分工場、その他の軍需関連工場に出かけた。分工場には、女子挺身隊として東北から徴用された女子が、多数働いていた。大空襲の爆撃で死亡した女子を荼毘に付したが、年端も行かぬ子供たちを、涙で送った。

大空襲の金田地区への爆撃は、詳しいことは分からないが、機載レーダーに道路が映り、攻撃目標にされたのではないのかな。

平塚大空襲時、飯島の集落で家が焼かれたとか、死者が出たなどの被害は無かった。しかし、焼夷弾が金旭中から木間商店の東を経て「下の田」付近にかけて、帯のように落とされた。
落下し突き刺さった焼夷弾の中には、花火のように火を噴いていた。夜間だったため、そのままだと爆撃の目標になるといけないので、兄と二人で慌てて、シャベルで掘り出し、用水の中に放り投げた。その時は、夢中だったので熱いと感じなかった。

不発弾もあり、屋根を突き破った。警防団員が「皆逃げろ、皆逃げろ、空襲だぞ」と触れ回った。田の中を走り、のどが渇いて田の水を飲んだりしながら、山を目指し、集落の北の石橋を通り、岡崎方面に逃げた。

２０年４月１８日（国府祭コウノマチ）の昼頃だったか、双胴の爆撃機Ｂ２４が２機、超低空で飛来し、そのうちの一機から機銃掃射を受けた。兵士のめがねや顔もはっきり見えた。湘南平の高射砲も死角に入るような、スレスレで飛び去った。

寺田縄も機銃掃射を受けている。敵機が通り過ぎてから、石を放り投げた。

大磯駅に爆弾が投下され、駅員が一人死亡している。自分はトラックの下に逃げ込んだ。そのトラックは火薬を満載し到着したてだったと、後から聞いたが、今思えば、恐怖で身震いする。運が良かったし仲間からは長生きするぞといわれた。
中には、昼食の弁当箱に機銃の弾が当たり、一瞬のうちに弁当が消えてしまった人もいた。少しでも弾がそれていたら・・。

大空襲の時、金田地区内にあった農業会の倉庫が爆撃を受け、保管の書類を守るために駆けつけた。もう一人と書類の間に被弾し、怪我をしてしまい書類を守ることができなかった。書類だけでなく保管してあった米も焼け焦げてしまった。

金田地区への爆撃は、「海軍火薬廠のモーター、ベルトなどの物資が地区内の学校や家庭に秘蔵され、その情報が米軍に漏れていたから」だ、との話があった。火薬廠の分散避難の一環で、金田で協力したのか。

焼夷弾は、バラバラと落ちてきて、岡崎からの排水路のトンネルに布団をかぶって、避難した。

個人の家に防空壕を掘ったが、部落でとか、共同で掘ることは無かった。

焼夷弾が自宅に落ち、大黒柱に当たり庭に落ちた。燃え出す前、布団に包んで持ち出した。戦後、除隊した後に後見ると大黒柱に穴が残されていた。

平塚大空襲を休暇中の実家で体験した。火災で軍服を燃やしてはならないので軍服を着たまま消火にあたった。物置は燃えたが母屋は残った。翌日、部落の人たちが家屋の消火をしている最中に隊に戻った。

大空襲の被害が小学校までの道沿いに集中しているが、海軍工廠からリヤカーで重要書類を運んでいる所を米軍に偵察され、攻撃を受けたとの噂がある。

終戦の一月前に帰国したが、上海から船で一ヶ月かかり、下関に着けず、萩港に帰還した。

平塚大空襲の時、秦野街道から当時の小学校までの道の両側が焼夷弾爆撃の対象になり、残った家もあるが、多くが被害を受けた。

小学校には海軍省の軍需品（モーターとも言われている）があったからか、爆撃は小学校付近で終わっている。（入野に接する寺田縄の一部も含まれる）

ある牛小屋に、結束されたままの不発の焼夷弾が落ち、胴体を貫通した牛の死骸を馬捨て場に運んだ。

不発の焼夷弾が最近まであったが、本体は劣化しぼろぼろとなり、金属部分は残った。

入野の被害がすごく、子供が死ぬか、自分が死ぬかの本当に辛い思いで過した。

防空壕は雨が降ると水が入り、蚊も多く沸く状態だった。古川排水路の昭栄橋たもとに掘られた防空壕に、むしろを水に浸し逃げ込んだ。遠くの人達も入ったりした。

平塚大空襲の夜は、近くの人の家でそばをよばれていた。警報が鳴って帰宅後火の手が上がった。

平塚大空襲の夜は街に外出後、ひと寝してからだったので、爆撃は余り遅くではなかったと思う。それは、７月１５日だったと記憶している。（正確には１６日・１７日）

家から見えた小学校は、燃え盛る火が窓から噴きあがり、それは綺麗だった。怖さを覚えず、とにかく綺麗だった。と思い出される。

東京でも空襲に合い、平塚に来てからも空襲に会った。焼夷弾がバラバラ落ちてくるのを「いろうじ橋」から見た。

照明弾が落とされ、あたりが明るくなるとＢ２９からの爆撃があり、生きた心地がしなかった。

空襲警報が鳴ればすぐに爆弾が落下し、夜、着たままで寝た。あんな哀れなことはなかった。

今の時代は、天国みたい。くる日もくる日も、はだしで畑作業を続け、田んぼにも焼夷弾が落ち、家の玄関にも落ちた。あの怖い気持ちは忘れられない。

小さな藪には近所の人達も逃げ込み、高射砲からの破片が、カチャン、カチャンと音を立てて落ちてくる。

子供だったので、桜の頃、「こうのまち」頃に飛行機を見た。攻撃を受けるなど思わず、手を振ったりしたが、よく撃たれなかったと、思い出される。

艦載機（グラマン）がよく飛来し、低空からの機銃掃射を受けた。

平塚市は、終戦近くにも大きな空襲があった。

朝ごはんを炊くにも火が使えない。炭で火をおこし鍋でご飯を炊き、隠れながらご飯を食べる。敵機から目標になる物は全部だめ、しょっちゅう偵察機が飛んでくる。洗濯物も干せず、空襲になると直ぐしまいこむ、を繰り返えす毎日だった。

金田に川崎の日吉小学校から疎開児童がきていた。農家に寝泊りし、入浴させていた。家では四人の児童を入浴させた。
子どもたちは、少林寺で勉強し寝泊りした。地域の農家の風呂に入り、シラミを残して帰った。
慣れないところに来ていたので、夜は寂しそうだったし、泣いてばかりいた。

平塚市への空襲が激しさを増し、町内で皆が寄って、「お米の有るだけを荷車に付け大山の方へ逃げよう」という話があったが、事を村長が聞きつけ、集められた皆の前で「十俵の米を持って行って、どこまで逃げても艦砲射撃でやれる事もある。逃げても十俵の命で終わってしまう事になるかも知れない。島（沖縄？）の人達は死ぬまで戦ったのだから、ここの人達はそんなことをしてはいけない。山の方に逃げても逃げ切れないので、ここで死ぬつもりで、自分の土地は自分で守れ」というような話があった。

その事をお姑に話したところ「自分の家を守れないかもしれないけれど、艦砲射撃の弾は、ここを通り過ぎて大山に飛んでいってしまうかもしれない。行く先で死んでしまうかもしれない。私はここに居座る」と言ったので、お婆ちゃんはたいした人だ、との思いを強くした。

家は焼かれ、リヤカーに布団を積み、あちこちに逃げた。今では、自分の姿が哀れにも思うけれど、いろいろな苦しみを我慢して子供たちを育てなければならないと決心している。

平塚大空襲後も逃げること最優先で、家は開けっ放し、まんじりともしない日々を過ごした。いろいろな事を経過して、気が強くなった。

戦争中の思い出は、言い尽くせないほどある。当時、ちゃんとした身体の人は戦地に赴き、残されたのは女、年寄り、子供だった。そういう中で、家が焼かれ、その苦しみは、今でも忘れられない。

＜ 以 上 ＞